

# 『風に紅葉』続々拾遺

大倉 比呂志

拙著『風に紅葉考―百花繚乱する〈性〉への目差し―』(武蔵野書院 二〇一八・一)に所収されている『風に紅葉』拾遺(初出、『学苑』二〇一四・八)、『風に紅葉』続拾遺(初出、『学苑』二〇一六・一〇)に引き続き、新たに気が付いた点を取り上げて、愚考を述べていくことにする。

\* \* \*  
本稿を成すに当たって、左記の注釈書類を参照した。略記号で示すことにする。

- ① 辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻一―」(『文学論輯』三十六号 一九九〇・一〇)
- ② 辛島正雄「校注『風に紅葉』―巻二―」(『文学論輯』三十七号 一九九二・三)
- ③ 関恒延『風に紅葉 依拠物語 本文 総索引』(遊戯社 一九九九・一)
- ④ 中西健治 校訂・訳注『風に紅葉』(中世王朝物語全集Ⅵに所収 笠間書院 二〇〇一・四)

なお、本文及び小見出しは鈴木泰恵との共編著『校注 風に紅葉』(新典社 二〇二二・一〇)により、上段は共編著、下段は参考までに④の該当個

所を示す。ちなみに、算用数字は巻(①では上・下)、漢数字は該当ページを示す。

『風に紅葉』以外の『源氏物語』『和泉式部日記』『堤中納言物語』の本文は、すべて新編日本古典文学全集による。

## 巻一

### ① 四 男主人公の姉妹である姫君と春宮との結婚

春宮に入内した関白の娘宣耀殿女御のことは、「御局、宣耀殿なり。御仲らひおろかならんや」と語られているわけだが、その傍線部は桐壺更衣の「御局は桐壺なり」(桐壺巻)という叙述と極めて類似している。それに対して、「春宮ノ」御元服の頃より候ひ給ふ殿の御兄の太政大臣の御女、麗景殿と聞こゆる、ことに御覚えおろかなるに」(以上、一・一四。上・一)とあるように、先に入内した麗景殿への愛情が薄い点から、宣耀殿とは正反対であると同時に、桐壺帝に最初に入内した右大臣女の弘徽殿女御は「やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の御諫めのみぞなほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひ

ける」(桐壺卷)であるにもかかわらず、帝寵は桐壺更衣に劣ると語られている点と類似している。すなわち、宣耀殿の語られ方は帝の寵愛する桐壺更衣と同じであるのに対して、麗景殿の叙述の仕方は傍線部のごとく、桐壺更衣の死後に入内して帝寵の厚い藤壺は「藤壺と聞こゆ」と語られているのと同様な叙述であるのにもかかわらず、麗景殿は帝寵が薄く、藤壺とは正反対である。このように、桐壺卷の後の局の叙述の仕方を利用しながら、ズラして用いられているところに本作品の工夫の跡が認められよう。

## ② 七 一品宮、姫君を出産

主人公(以下、大将・内大臣と官位は上昇するが、それとは関係なく男君と称する)の正妻一品宮は姫君を出産するわけだが、「御産屋の儀式、皇子たちに劣らず」(1・17。上・13)舉行されたと語られているところからすると、生まれてきた姫君が将来入内して、皇室に参入し、中宮の地位に就く可能性があると予想されよう。それは光源氏が三歳の時に舉行された袴着の儀式は「一の宮(注―光源氏の兄で、後の朱雀帝)の奉りしに劣らず」(桐壺卷)とあり、第二皇子である光源氏は第一皇子と同等の規模であったと語られており、紆余曲折があったにもかかわらず、藤裏葉巻で准太上天皇の位が授けられたという点からも、男女の違いがあるとはいえず、この姫君の将来は光源氏に準ずるものとして考えられよう。だが、巻二後半において、姫君の父男君が内大臣の職を返上して、修行に邁進したためであろうか、後立てを欠いた姫君の入内に関する記事はない。

このように『源氏物語』を利用しつつも、そこから離陸しようとしたのではなからうか。

## ③ 一〇 主人公に対する太政大臣の梅見の宴への招待と北の方との関係

男君が太政大臣北の方との情交を営む寸前の件は、

女(北の方)の御気色近くてはいとど愛敬つき、をかしげにおはするに、酔ひ少し進みぬるまめ人(注―男君の御心もいかがりけん。夕夜の影はなやかにさし入りて、梅の匂ひもかごとがましきに、姫君の御新枕にはあらで、あやしの乱りがはしきや。(1・22。上・17)

とあり、傍線部によれば、男君にとって夕月の光が明かる過ぎるとともに、梅の花の匂いも強いので、それらを避けるために奥深い部屋に入り、酔いが少々回って、多少理性が朦朧としている「まめ人」男君は北の方との間で早く〈性戯〉に取りかかりたいという思いが強かったのではないのか。

そのためには奥深い部屋に入る口実が必要だったのであって、月光の明かるさと梅の強烈な匂いは口実に過ぎなかったのである。それが「かごとがましき」と語られているのであり、その一語に語り手の批判的言説がこめられているのではあるまいか。

## ④ 一一 主人公、一品宮に昨夜のことを報告、北の方との度重なる密会

男君は一品宮に昨夜の北の方との情事に関して報告した後、太政大臣に文をしたためるわけだが、

① 大臣（＝太政大臣）にも嬉しかりしもてなしのやう、（小姫君へ）行く末の御後見おろかなるまじきよしなど聞こえ給へる御返り、そぞろに喜びきこえ給へるもをかし。（1・21。上・19）

と語られており、①と②とは密接に連動している。①は表面上では男君が太政大臣に対して梅見の宴に招待されたことへの礼を述べたものだが、裏面では「大臣は例の我しもとく酔ひ給ふ癖にて、『むげに無礼に侍り』とて、（奥ノ方ニ）入り給ひ」（1・21。上・27）たので、北の方との（性戯）に遠慮なく耽ることができたと皮肉っぽく語られているのではなからうか。<sup>（注）</sup>とすれば、太政大臣は早く寝てしまったために知らない可能性もあるが、その北の方は男君との濃厚な情事に耽っていたことが皮肉を混じえて語られようとしたのではないのか。②は表面では大臣が小姫君への将来における世話を依頼したところ、男君がそれを承諾したことへの感謝が語られているわけだが、①と呼応して、何も知らない大臣がむやみに礼を述べているのは滑稽だと語られている。それは引用本文の文末にある「をかし」という一語に顕在化していよう。つまり、男君と太政大臣との間にはズレが生じているのであり、大臣が何も知らずにいる間に、北の方が男君との間で性的飽和状態に陥っていたと語られている点を看過すべきではなからう。

（注）「自分の妻が寝取られたことも知らないで喜んでるなんて、おめでたいこと」（A）と指摘されている。

## 5 一九 男主人公と承香殿女御との密会

男君が里下りをしている承香殿女御と彼女の実家で密会する件は、次のように語られている。

（男君へ）几帳押ししわけ、（承香殿女御ニ）寄り居給へる御様に、あまり直面するはつつまじうて、ひき入り給ふ御袖を（男君へ）ひかへて、

⑱ 「忍ぶるか雲のよそなる時鳥音にあらはれて今は聞かばや思ふてふことも、たがひに晴るけはべらんこそ」と聞こえ給へる御気色など、言ふもなかなかなり。

⑳ 語らば雲居はよそになりぬとも君があたりし声や尽くさん（1・31。三二。上・28―29）

の⑱歌の傍線部は、男君が宮中から退出した女御の気持ちをはっきりと聞きたいという意であり、「時鳥」は女御を比喻している。

ところで、『和泉式部日記』冒頭部で帥宮敦道親王が「女」に橘の花を贈ったことに対して、

（女ハ）ことばにて聞こえさせむもかたはらいたくて、「なにかは、（帥宮ハ）

あだあだしくもまだ聞こえたまはぬを、はかなきことをもと思ひて、

薫る香によそふるよりはほととぎす聞かばやおなじ声やしたると聞こえさせたり。

と語られているわけだが、「ほととぎす」は帥宮を比喻し、傍線部はあなただの声を直接聞きたいのだ、亡くなった兄宮（為尊親王）と同じ声であるのかどうかの意味であり、ともに「時鳥」には詠歌の対象者たる相手が詠み込まれており、相手の気持ち（声）が聞きたいと希求しているのであって、歌の構造が極めて類似しているのと同時に、恋の初期段階の歌である点から判断すると、『風に紅葉』の該当箇所は『和泉式部日記』の冒頭部分から何らかの影響を蒙っていると考えられるのではなからうか。

〔6〕 二七 男主人公、遺児若君を伴って帰京・三二 男主人公、  
遺児若君を溺愛

男君は妹の宣耀殿女御が第二子を懐妊したものの、その経過が思わしくないために、安産の祈禱を依頼する目的で住吉に赴き、そこで亡き兄の忘れ形見である遺児若君と遭遇して、都に連れ帰り、正妻一品宮に引き合わせる件は、

④(男君ハ自分が都ヲ留守ニシタタメニ)女宮(＝一品宮)のいかに(独り寝ヲ)ならず思しつらん、とまづ御心も空なれど、この人(注―遺児若君)をいつしか手も放ち給はで、「かかる人をなん儲けてはべる」とて、(男君ハ遺児若君ヲ一品宮ニ)見せきこえ給ふ。(1・四二。上・三八)

と語られているわけだが、男君は自分の留守中に一品宮の慣れない一人寝のことを心配していたのである。男君が一品宮の独り寝を心配する件は、巻二において男君が加行のために一品宮と別々に暮らさなければならぬ状況になった時、

⑤(内大臣(＝男君)は、宮の御独り寝をまめやかに心苦しう思して、……(2・八四。下・八六)

とあるように、ここでも一品宮の独り寝を心配しているのだ。だからこそ、男君は自分の代わりに遺児若君を一品宮に提供した結果、一品宮は遺児若君の子を懐妊するのである。とすれば、④において男君が一品宮の独り寝を心配する件で、遺児若君の存在に触れている点を考えると、④の記事の執筆段階で既に一品宮と遺児若君との密通の構想がなされていたのではな

かろうか。それは④の記事の直後に、男君が遺児若君に乳母の傍で寝るようになつたところ、男君の傍でなければ一人で寝ると言ったのをかわいそうに思って、「宮の御そばへも具しきこえ給ふ。終の果ていかがあらん」(1・四三。上・三九―四〇)と草子地の形で語られており、そこに「読者の関心を引きつけようとする」(A)意図があるとしても、今後における危うい状況が先取りされているのではなからうか。

さらに、遺児若君が宣耀殿女御と対面した後、男君は遺児若君に関して、  
「いで、鉄漿つけたる口見ん。今少しをかしげにこそ見ゆれ。いづくにても久しうなれば、待ちやすらん、など心に離れぬこそ。これぞほだしなるべき。(遺児若君ガ)何事を振る舞ひたらんに、心づきなしと思ひてん。色好み立て、思ひ寄りぬ限なく振る舞へよ」など(男君ガ遺児若君ニ)言ひる給へれば、  
「かく教へきこえさせ給はんに、まことに残ることあらじ。あまりなることはさてしも果てぬならひにて、御仲(注―男君と一品宮との仲)や悪しからん」など、(宣耀殿女御付キノ乳母デアル)中務聞こゆれば、……(1・四九―五〇。上・四六―四七)

と語られており、傍線部は、

⑥行き過ぎなことはそのままでは終わらないのが通例であって、若君をそのように我儘放題にしておく、一品宮との夫婦仲にも具合が悪いだろう。(D)もほぼ同じ解釈)

と訳されているわけだが、話題の中心が遺児若君の対女性関係に照射されている点を考えると、

※遺児若君が女に過剰といえるような興味を持つならば、そのままでは終わらないから、身近にいる一品宮に興味を抱くようになって、男君と一品宮との夫婦関係が悪くなるだろう。

と理解すべきだろう。

## 卷一

⑦ 一四 男主人公の故式部卿宮の姫君への恋慕・一五 男主人公、帰邸・一六 故式部卿宮の姫君、行方不明

故式部卿の姫君との激しい情事後、男君は次のように語られている。

例のやうに、宮（＝一品宮）の御方へもやがても渡られ給はず、あはれなりつる人（注―姫君）の面影、気配、身を離れぬ心地して心苦し。（一品宮ト）ほかほかにて一夜も明かせば、ここ（注―姫君）もまたおぼつかなし。いかさまにも忍びて、（姫君ヲ）片つ方に隠し置かむ、と思す。三位中将（＝遺児若君）おはして、……例のもろともに隙間なう大殿籠りて、昼つ方ぞ、宮の御方へ渡り給へる。（2・六八。下・六八―六九）

男君は帰宅後、すぐには一品宮を訪れず、姫君との情事の余韻を一人で噛みしめ、姫君の処遇をどうしようかとあれこれ思い悩んでいた時に、遺児若君がやって来て、同性愛に耽った後、一品宮のもとに出かけて行くのである。すなわち、姫君の処遇をめぐって悩んでいた時に、遺児若君が訪ねて来たために、その懊悩を払拭する目的で同性愛に耽溺して、気持ちを切り換え、一呼吸置いて一品宮のもとに赴いたのではなからうか。とすれば、

男君にとって遺児若君との同性愛は一種の気分転換装置であったのだ。それゆえに、男君にとって遺児若君との同性愛は次の行動に移る際の活力源でもあったのだといえよう。だからこそ、一品宮のもとに向いて、「姫君トノ情事ノタメニ」二夜まで思ひのほかなりつる旅寝の怠りなどのたまひきこえ給ひて、もろともうち臥し給ひぬる」（2・七一。下・七二）とあり、傍線部のごとく、一品宮との共寝を可能にしたのではないのか。一方、姫君が行方不明となり、遺児若君が訪ねて来た折には、男君が「頬杖うちつきて、火をつくづくとながめ給へる御さまのあやし」（2・七二。下・七三）いので、真面目な様子で座っている遺児若君を呼び、同性愛に耽っているのを考えると、男君は不安な状況に陥った場合には、遺児若君と同性愛に耽る傾向があり、不安な状況を同性愛という逃避行によって解消させようとしているのであって、そのような意味で遺児若君は男君にとって懊悩を解消するアジールの対象であったのだ。

## ⑧ 二二 男主人公の承香殿女御訪問

男君は加行するのに当たって、今まで関わって来た女性たちを一巡する。最初にそれほど愛情が濃厚ではない承香殿女御を訪問するわけだが、女御側の対応は「御褥さし出でたり」（2・七九。下・八〇）とあるごとく、今までとは異なり、他人行儀な対応をし、「無言の嫌がらせ」<sup>⑧</sup>をすると同時に、

宰相の君、「珍しきことは、所違へにや、とまで疑はれはべりて」と聞こえ<sup>⑨</sup>伝ふる言葉につきて、（男君ハ女御ノモトニ）すべり入り給ひつ、……（2・七九。下・八一）

において、④は「辛辣な厭味」(⑤)であると理解されるように、女御が男君を表面上冷たくあしらっている背景には、男君と女御の異母妹である姫君との関係を根に持っているからだと考えられよう。

さらに⑥では、宰相の君が女御の伝言を男君に伝達する際に、男君は女御のもとに闖入するのである。これは『堤中納言物語』所収の『逢坂越えぬ権中納言』の巻末で、根合に勝利した男主人公権中納言は長年にわたって恋慕してきた宮を訪れ、胸中を訴えるものの、宮はなびこうとしないために、宰相の君がその旨を男主人公に伝えようと座を立った後に、「声をしるべにて、(宮ノ居場所ヲ)たづねおはしたり」とあるように、女房の声を道案内にして男主人公は宮のもとに闖入する。これを参考にして男君が承香殿女御のもとに闖入する場面が造型されたのではなからうか。また、取次の女房名が宰相の君という共通点を持っていることも重要だろう。

ちなみに、『逢坂越えぬ権中納言』の成立年次は『堤中納言物語』に所収されている作品の中で唯一明らかであり、天喜三年(一〇五五)五月三日の庚申の夜に開催された『六条斎院祓子内親王家物語歌合』に小式部という女房によって提出されたものであることから、それより後に成立した『風に紅葉』の当該個所に影響を与えたのではないかと推測される。

(注) 男君には承香殿女御との寝物語から行方不明になった姫君に関する情報を得ようとする目的があったのではないかと推測したことがある。詳しくは拙著『風に紅葉考―百花繚乱する〈性〉への目差し―』第六章を参照されたい。

## ⑨ 二四 男主人公、加行の準備

男君の父親である関白左大臣の正妻女一宮の兄で、朱雀院と同腹の中務

宮は、子供がいなかったために、男君をかわいがり、

この内大臣(男君)幼くおはせしを、限りなく愛しきこえ給ひて、二条京極わたり、三町ばかり占めて、御堂、御倉町広う造り磨き給へる宮、領じ給ひし所々、御宝物ども、さながらこの殿(男君)に奉り給へりしを、この年頃、なほなほ造り添へ給ひて、御持仏なども気近う、仏の御飾りも世の常ならずしおき給へる所にて、この御行ひはし給ふべく思し設くれど、……(2・八二。下・八三一―八四)

とあるごとく、中務宮は男君に自分の所持している屋敷などを無償で贈与し、男君はそれを基盤に増築して、加行用の部屋を準備したことが語られている。いわば、男君は中務宮から無償で広大な土地や殿舎が贈与されたのだ。

ところで、『源氏物語』では斎宮に卜定された娘(後に冷泉帝中宮)とともに伊勢に下向したが、娘の任期が終了して帰京した六条御息所が病に陥ったために、見舞いに訪れた光源氏に対して、娘を男女の関係抜きで後見してくれるように依頼した後、御息所は死去した(濡標巻)と語られている。その後、「六条京極わたり」に、中宮(注―六条御息所の娘で、後に中宮)の御旧き宮のほとりを、(光源氏ガ)四町を占めて造らせたま(少女巻)うた六条院は、光源氏が中宮の後見と引き換えに手に入れた六条御息所の旧邸である点に注意すると、中務宮の男君かわいさのゆえに邸宅が贈与された状況と、光源氏が中宮の後見をすることによって、只取同然で獲得したそれとは異なっているが、両作品はいわば広大な敷地などが贈与されたという共通性を持ちながら、『源氏物語』の六条院を褒奏させて、考案されたのが中務宮旧邸であったと考えられる。

⑩ 五二 新年、父関白と遺児若君、男主人公を訪問

(共編著では「五三」となっているが、誤りなので、「五二」と訂正する。)

一品宮の死後、男君は官職を返上して加行に専念しているわけだが、その翌年の元旦の記事は次のように語られている。

大将(＝遺児若君)、「朝拝に参らん」と出で立ちて、まづこれ(注―男君の住む京極二条邸)へ参り給へり。「男君ノ」御供をのみこそしならひてはべるに、一人はいかにはべらんとすらん。春の光もかひなうこそ」とて、(遺児若君ハ)こぼれ落ちぬべき御涙を言忌みして、「大臣<sup>①</sup>の御供にこそ。とくとく」とのたまふほどに、大臣(＝父関白)ぞ出で立ち給ひけるまゝに、まづこれ(注―京極二条邸)へおはしたる。御帰りのほど、夕方(関白ハ)渡り給はん、とこそ思しけるに、覚えなう御心ざしのほど、例の涙こぼれ給ふ。(2・一三三。下・一一四)

これは遺児若君が「大臣」のお供をしようとして朝拝に参内するために、男君のもとに赴く件である。ここは理解しにくい個所だが、恐らく遺児若君は日常的に男君のお供として行動をともにしているから、一緒に連れ立って参内しようと申し出たところ、男君が色よい返事をしなかったのではないのか。それを聞いて遺児若君は涙を流しそうになったものの、今日ほめたい元旦であるからと我慢していたところ、男君が遺児若君に自分の代わりに父関白のお供をすべく関白を迎えに行くように指示したところ、関白が既に自邸を出発して男君の屋敷に到着したと理解するのが妥当ではなからうか。とすれば、傍線部①「大臣」は男君の父関白と考えるべきで

あると同時に、②の主語を遺児若君と解する考え(⑩)もあるが、男君と理解すべきだろう。というのは、男君が内大臣の官職を返上したために、その充当人事が行なわれ、男君の後任として太政大臣の息子である右大将が内大臣兼左大将に任命されている点から、もはや男君には肩書きがなく、父関白の参内のお供として随行するのはふさわしくないと考えられるからだ。すなわち、関白のお供として、関白の異腹の子で、男君とは異母兄弟であると世間には公表されている遺児若君はふさわしいと男君は考えて、遺児若君に関白のお供をして参内すべきだという指示を与えたものと理解する必要があるのではなからうか。

(おくら ひろし 本学名誉教授)